

# 高校 国語の学習

## 1 総合編

### テスト問題用紙

.....

- ・先生から試験開始の合図があるまで、ページをひらかないこと。
- ・問題は、小説 1 問／随筆 1 問／古文 1 問／国語基礎力 4 問の計 7 問ある。
  - P 2 ～ P 3 …小説
  - P 4 ～ P 5 …随筆
  - P 6 ～ P 7 …古文
  - P 8 …国語基礎力
- ・◎印の問いは、本書では問われなかったものである。
- ・解答はすべて、別紙の解答用紙に記入すること。



京都書房 ②

## 1 次の文章を読んで、後の問いに答えよ。

――農家の長男に生まれたグラフィックデザイナーの「恵介」は、父親が倒れたという知らせを受け、久しぶりに妻とともに故郷に帰る。翌朝、母親は早くからハウスの働いていた。……

I 「朝のうちに採っておかやあと、味が落ちるら。」言いわけじみた（A）調で言い、作業に戻ってしまった。昨日今日身に付けたとは思えない、（B）慣れた動作に見えた。

「ねえ、どうしたの、これ。」恵介は苺が並んだトレイを指さす。「え？ ああ、薄型トレイトレトレ君。カキタ種苗の新製品。」いや、そっちじゃなくて。「苺のこと。」「紅ほっぺ。」品種はいいから。「なんでトマトをやめたの。」親父には似合わない。③ トマトの時も思ったことだが、苺はなおさらだ。

「苺は儲かるって、お父さんが言うもんで。まあ、そんなでもなかったけどね。去年は。」

「去年から？」「おとしから。」「なぜ急に。」「ほら、苺のほうがおしゃれじゃなか。喜ぶんじゃないか、って思っただらあね。」④ 「喜ぶって、誰が？」聞いたとたんに恵介には答えがわかってしまった。自分の質問の答えが聞きたくなくて、母親の隣にしゃがみこみ、収穫を手伝う、ふりをした。

II 実をぶら下げている茎は、楊枝のように細いの、なかなか折れない。母親が（C）の皺を真ん中に集めた。「ほら、こうするの。」指の間にへた近くの茎をさみ、折るというより、くいとひねりあげた。まねを試みた。くいつ。苺を潰してしまつた。難しいもんだ。くいつ。くいつ。ようやく採れた。母親が苺をひと粒、恵介の（D）先に近づけてくる。

「食べてみ。」差し出した恵介の手のひらに落としたのは、ひときわ大きくて、ごつごつと歪なかたちをした苺だ。「まず先っぽのどこ齧ってみ。先っぽがいちばん甘いから。」言われたとおりにした。

あ。ちよつと、待て。なんだ、これ。甘い。ほのかに酸っぱい。うまい。苺って、こんなにうまいものだっけ。すっかり食べ慣れてしまつて、味なんか忘れていた。もしかしたら、いままで食べた苺の中でいちばんうまいものかもしれない。

「なぜ。」こんなにうまいのか、とまで言う必要はなかった。けつして鋭い人ではないのに、子どもの頃から母親には、表情だけで心を見抜かれてしまう。

「そりゃあ、採れたたでもんで。それに、ほら、出荷すんのは、熟れる前に詰めちゃうから。」

十八年前、東京で暮らしはじめて気づいたのは、野菜の味が違うことだ。「X」、とうもろこし。夜店で食う焼きとうもろこしも、スーパーで買ったのを茹<sup>ゆ</sup>でてみても、田舎のとうもろこしとはまったく別物だ。

(萩原浩『ストロベリーライフ』)

◎問1 ( ) A～Dに入ることばをそれぞれ次から選び、記号で答えよ。(同じことばは二度使わない。)

ア 手 イ 顔 ウ 口 エ 鼻

問2 — 線部①はどのようなことについて尋ねたものだったのか。具体的に記せ。

問3 — 線部②が指す事柄を一語で答えよ。

◎問4 — 線部③について、「トマトの時」の説明として、最も適当なものを次から選び、記号で答えよ。

ア トマトの栽培を始めた時      イ トマトを受け取った時  
ウ トマトを食べた時              エ トマトの出荷をやめた時

問5 — 線部④について、父親はどういうことを期待したのか。最も適当なものを次から選び、記号で答えよ。

ア 妻が、おしゃれな苺を気に入ってくれること。  
イ 妻の作業が、以前より簡単になること。  
ウ 恵介が、おしゃれな苺を食べておいしいと思うこと。  
エ 恵介が、農業に興味をもってくれること。

問6 段落Iから、「恵介」の帰省が久しぶりであったことがわかる短いやりとりを抜き出して答えよ。(記号を含む。)

◎問7 — 線部⑤の理由は、文中でいくつ述べられているか。漢数字で答えよ。

◎問8 「」Xに入ることばとして、最も適当なものを次から選び、記号で答えよ。

ア さらに      イ ともかく      ウ やはり      エ たえば

2

次の文章を読んで、後の問いに答えよ。

——幼かった昔、長い休みに入ると、いつも山奥の母の実家へ行った。大勢のいとこたちがあちこちから集まり、一緒に遊んだ。ある時、山を歩き……。

門前のみやげ物屋で、それぞれがアメ玉やチューインガムを買った。伯父から貰った十円玉は、今日の百円ぐらいに相当したであろうか。(A) けっこうな小遣いであつた。

ところが、いざ買い物しようとする、私の十円玉が見当たらない。どうやら山歩きの最中に、どこかで落としてしまったらしかった。探しに返ろうにも深い山道である。私は石段の中途に膝を抱えて泣いた。いとこたちはみなアメ玉をなめながら屋敷に帰ってしまった。

(B) ひとり、ひとつ年長のいとこが泣きくれる私を励ましながら、見つかるはずもない十円玉をけんめいに探してくれていた。いとこの名はヒロシといった。きかん坊ばかりのいとこたちの中で、彼だけは「I」でも静かな子どもだった。その性格はたぶん、物心つかぬうちに父親——すなわち私の母の兄と死に別れていたせいかもしれない。おしなべて幸福な家庭に育った他のいとこたちに比べ、彼だけはまちががなく、苦勞の分だけ大人びていた。

私は日ごろから泣かぬ子どもだった。その私が膝を抱えて泣いたのは(C)、十円玉を落としたからではないと思う。夕闇の迫る神社の、はるかな石段を行きつ戻りつして私の十円玉を探してくれているヒロシの、愚直なまでのやさしさに泣かされたのであろう。

山奥の冬の陽は、つるべ「II」に暮れてしまった。

「あつたよ! ジロウ、あつた、あつた。」ヒロシはそう言って、私に十円玉を握らせた。とたんに私は、ヒロシのやさしい笑顔を正視できずに、声を上げて泣いた。子ども心にも、その十円玉の出所がわかったからである。それはヒロシのポケットの中の十円玉にちがいがなかった。ヒロシは拒否する言葉も思いつかぬ私をみやげ物屋まで連れて行き、私の欲しそうなものを買った。

「ほら、食べるよ。(D) 泣くなつて。」ヒロシちゃんは? 「おれは食べたくない。もうすぐごはんだから。」

木下闇の帰り道で、ヒロシは泣きやまぬ私の手をずっと握っていてくれた。私が小学校一年、ヒロシは二年生だったろうか。ヒロシはそんな少年だった。

(浅田次郎『福音について』)

◎問1 ( ) A～Dに入ることばをそれぞれ次から選び、記号で答えよ。(同じことばは二度使わない。)

ア もう イ ただ ウ ともかく エ たぶん

問2 — 線部①について、「私」が見つかるはずもない」と思ったのはなぜか。その理由となる、連続する二文を文中から抜き出し、最初の五字を答えよ。

問3 — 線部②について、「けんめい」さが具体的に書かれている部分を文中から二四字で抜き出し、最初の五字を答えよ。

問4 「」Ⅰに入ることばとして、最も適当なものを次から選び、記号で答えよ。

ア 慎重 イ 冷静 ウ 温厚 エ 温暖

◎問5 「」Ⅱに入ることばとして、最も適当なものを次から選び、記号で答えよ。

ア 投げ イ さがし ウ 落とし エ さがり

問6 — 線部③と言って、「ヒロシ」が十円玉を探すのをやめたのはなぜか。適当なものを次から二つ選び、記号で答えよ。

ア いつまでも泣きやまない「私」を、とにかく黙らせたかったから。

イ「私」の悲しみをこれ以上長引かせないようにしようと思ったから。

ウ 見つかるはずもない十円玉が、見つかったから。

エ 日が暮れて、落とした十円玉を探すのが難しくなってきたから。

オ 神社の長い石段の上り下りで、疲れてしまったから。

◎問7 — 線部④は嘘だったと思われるが、本当の理由はなぜだったのか。最も適当なものを次から選び、記号で答えよ。

ア 自分のものを買うお金がなくなっているから。

イ 泣き続ける「私」に疲れてきているから。

ウ「私」と一緒に一刻も早く家に帰りたいから。

エ「私」に食いついた坊だと思われるたくないから。

問8 「ヒロシ」の「やさしさ」が読みとれる行為はいくつ描かれているか。漢数字で答えよ。

## 3

次の文章を読んで、後の問いに答えよ。

「奥山に、猫<sup>\*</sup>またといふものありて、人<sup>①</sup>を食らふなる。」と、人の言ひけるに、「山<sup>②</sup>ならねども、これらにも、猫の経<sup>へ</sup>上がりて、猫またになりて、人<sup>\*</sup>とすることはあなるものを。」と言ふ者ありけるを、何阿弥陀仏<sup>\*なにあみだぶつ</sup>とかや、連歌<sup>れんが</sup>しける法師の、行願寺<sup>\*ぎやうくわんじ</sup>のほとりにありけるが聞きて、ひとり歩<sup>あり</sup>かん身は、心<sup>③</sup>すべきことにこそと思ひけるころしも、ある所にて夜<sup>④</sup>ふくるまで連歌して、ただひとり帰りけるに、小川<sup>こがは</sup>のはたにて、音<sup>おと</sup>に聞きし猫また、あやまたず足<sup>あしもと</sup>許へふと寄り来て、やがてかきつくまに、首<sup>⑤</sup>のほどを食はんとす。肝<sup>きも</sup>心も失<sup>う</sup>せて、防<sup>こま</sup>がんとするに、力もなく足も立たず、小川へ転<sup>ころ</sup>び入りて、「助けよや、猫また、よや、よや。」と叫べば、家々より松どもともして走り寄りて見れば、このわたりに見知れる僧なり。「こは如何<sup>いか</sup>に。」とて、川の中より抱<sup>いだ</sup>き起こしたれば、連歌<sup>か</sup>の賭物<sup>かもの</sup>取りて、扇・小箱など懷<sup>⑦</sup>に持ちたりけるも、水に入りぬ。希有<sup>けう</sup>にして助かりたるさまにて、這<sup>は</sup>ふ這<sup>は</sup>ふ家に入りけり。

飼ひける犬の、暗<sup>ぬ</sup>けれど主<sup>ぬし</sup>を知りて、飛びつきたりけるとぞ。

〔徒然草<sup>つれづれぐさ</sup>〕第八九段

\*猫また…化け猫。尾が二つに分かれ、人に害をなすという。

\*何阿弥陀仏…僧の名。浄土宗・時宗で、一字の下に「阿弥陀仏」と添えるのが流行した。

\*行願寺…京都市の中心部にある天台宗の寺。草堂とも呼ばれている。

◎問1 — 線部①の現代語訳として、最も適当なものを次から選び、記号で答えよ。

- ア 今、人を食っている    イ 人を食おうとしている  
ウ 人を食ったのだった    エ 人を食うということだ

◎問2 — 線部②の現代語訳として、最も適当なものを次から選び、記号で答えよ。

ア 山ではないけれども      イ 奥山でなくても  
ウ 山なのだから      エ 山続きのせいで

問3 — 線部③の下に省略されている語をひらがな二字で答えよ。

問4 — 線部④について、深夜であったことがわかる部分を、ここより後の文中から七字で抜き出して答えよ。

問5 — 線部⑤について、実際は何が「かきつ」いたのか。文中から五字で抜き出して答えよ。

問6 — 線部⑥について、「法師」は何が「首のほどを食はんと」していると思ったのか。文中から三字で抜き出して答えよ。

問7 — 線部⑦の現代語訳として、最も適当なものを次から選び、記号で答えよ。

ア 水の中に落ちそうだった      イ 水の中に落ちてしまった  
ウ 水の中に落とすまいとした      エ 水の中には落ちなかった

問8 本文の内容に合致するものを次から一つ選び、記号で答えよ。

ア 法師は油断して猫またに襲われたが、間一髪で犬が助けてくれた。  
イ 法師が早合点して、ただの猫を猫またと思い込んで小川に飛び込んだ。  
ウ 法師はおびえるあまり、犬を猫まただと勘違いして大騒ぎになった。  
エ 法師は油断していて猫またに襲われ、大切な品々を水につけてしまった。

問9 右の文とかかわりの深い四字熟語として、最も適当なものを次から選び、記号で答えよ。

ア 暗中模索      イ 東奔西走  
ウ 五里霧中      エ 疑心暗鬼

問10 右の古典作品の作者名を漢字で答えよ。

4

次の各問いに答えよ。

A 次の和歌・短歌の短評をそれぞれ下から選び、記号で答えよ。

- ① おり立ちて今朝の寒さを驚きぬ露しとしと柿の落ち葉深く 伊藤左千夫  
 ② のど赤き玄鳥ふたつ屋梁にゐてたらちねの母は死にたまふなり 斎藤 茂吉  
 ③ 湧きいづる泉の水の盛りあがりくづるとすれやなほ盛りあがる 窪田 空穂  
 ④ 楽章の絶えし刹那の明るさよふるさとは春の雪解なるべし 馬場あき子  
 ⑤ 花の色はうつりにけりないたづらにわが身世にふるながめせしまに 小野 小町

- ア 掛詞を多用し、むなしく過ぎた日々を思う。  
 イ 写生を基調としながら、悲しみを荘重に歌いあげる。  
 ウ いきいきとしたイメージの広がりて充足感を詠む。  
 エ 自然の動きに覚える感動を一点に集中して歌う。  
 オ 連用止めで、秋の季節の推移を詠んでいる。

B 次のことわざの（ ）に入る漢数字を答えよ。また、完成したことわざの意味をそれぞれ下から選び、記号で答えよ。

- ① ( ) 聞は一見にしかず ア 幼いときの性質は一生消えない。  
 ② ( ) つ子の魂百まで イ 実際に確かめることが大切だ。  
 ③ 一を聞いて ( ) を知る ウ 非常に賢い。  
 ④ 悪事 ( ) 里を走る エ ほんのわずかだ。  
 ⑤ ( ) 牛の一毛 オ 悪い行いや評判はすぐに世間に知れ渡る。

C 次のことわざ・慣用句とかかわりの深い語をそれぞれ下から選び、記号で答えよ。

- ① 二枚舌を使う ア 忍耐  
 ② 石の上にも三年 イ 躊躇  
 ③ 目と鼻の先 ウ 近所  
 ④ 藪から棒 エ 虚偽  
 ⑤ 二の足を踏む オ 突然

D 次の——線部の漢字はひらがなに、カタカナは漢字に直せ。

- ① 添付 ② 制御 ③ 芝生 ④ 吹雪 ⑤ 先駆者 ⑥ イゼンとして直らない。 ⑦ カンゲンに乗せられた。  
 ⑧ 母親のオモカゲがある。 ⑨ ゼンブクの信頼を寄せる。 ⑩ シキイをまたがせない。